

Title	歐人の支那研究(石田幹之助著, 共立社発行)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.3 (1932. 10) ,p.175(503)- 177(505)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19321000-0175">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19321000-0175</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

於て常に其の歴史事象の根幹に横はり歴史發展の大動力とも見得る古今を貫く原則を發見し、それを正理とか神道とかいふ文字で現はしそれを説いたものが本書ではないかと思ふのである。(二九八頁)

親房はそれをよく知つて居たらう。けれども巧に體をかはして「官途事元弘一統、公家政道、爲被復舊規也、坂東人々出身昇進、以後可被追治承以來代々風儀事歟」と言ひ、坂東出身者の推舉は頼朝の先例に學びすべて將軍の推薦による外に方法なき事を申遣はすのであるけれども、親房は是が非でも官途の昇進を求め、それを親房が阻止して居るかに解し、——或は解した様に見せかけて、親房を苦しめたものであつた。親房としても全く苦しい立場に置かれた。それがために種々の先例舊規の調査研究が必要であつたらう、『職原抄』の編述がこの必要からだとは言ひはしないが、何等の因縁なしとも思はれない(二三七頁)しかも研究的良心は飽く迄強く、現實に遠ざかることなく、加ふるに學問的情熱は熾烈にして遺憾なく行間に溢れ、犇犇と胸に迫るものがある。

新史料に依る新解釋も隨所に見られ、例へば、横橋家雜掌の晏案に依るその如きはその一例である。即ち卿が興國四年十一月十一日、關大寶兩城の陥るまで常陸に在つたこと、又興國七年十一月十三日には、日本書紀をその子春日侍從顯能に授けており、正平三年には大和におつたことは明かであるが、如何にして、何年に常陸を去つて近畿に還つたかを明かにすることは從來出来なかつたが、氏は本書に依つて卿は常陸から海路尾張の宮崎に到着したのであるとせられてゐる。本書の最初の目的は十分達せら

れ、更に専門學者への提示も見事になされてゐる。さきの「著者の言」は著者の謙讓の致すところであり、偶偶著者の學者としての偉大さを實證するの結果となつたのである。是非一讀をお薦めする。

(菊判本文四二二頁、定價金參圓)(淺子勝二郎)

## 歐人の支那研究

(石田幹之助著)  
共立社發行

極東に關する西人の研究は、極めて歴史古く、部門多岐に互り、かつ、あらゆる國語に編述され、これに一通り通曉することは、尋常人のよくする所ではない。我石田幹之助氏は、一方東洋文庫主任として繁務に携る傍、此方面の書誌學に研鑽深く、其學識は、内外の學者に認められてをる。支那學者マスベロ氏の如き先年日本來朝の際上京直ちに東洋文庫を問ひ、其蒐藏を綿密に閲した程の研究欲旺盛の人であるが石田氏の學識を稱贊し、在留各國學者間にも極めて敬重せられてをる旨を予に語られた事を記憶する。「現代史學大系」の企てが發表せられるや、同氏の「歐米人の支那及び日本研究」は、最も矚目せられたる篇の一つであつた。然しながら實際の所多忙寸暇なき氏が果して此大事業に身をもつて當られ得るや、世間は書肆の發表の眞偽を疑つた程である。然るに學に篤き同氏は、周到なる注意、綿密なる考證を重ね、一つの書名、一つの發行年月日すらいやしくする所なく、此處に萬人の待望した「歐人の支那研究」なる快著を學界に提供せられた。氏の絶大なる學的貢獻に對し、吾人は衷心より感謝に堪えぬ者である。

由來我國の東洋史學界は、研究者其人に乏しくないが東洋學の成果を一般民衆に傳へ、また研究相互の聯絡をはかる所謂書誌學的方面に於て遙か歐洲東洋學界の後へにある。此間にあつて我石田氏は、實に特異の一存在であり、東洋文庫を中心として常に學界の融合を計り、研究の聯絡綜合の必要を説かれつゝあつたが、今や此新著により歐洲に於ける支那知識の變遷及び支那研究の發達の徑路を明快に説明し、此方面の事情に比較的闇い我國東洋學者に極めて便利なる手引きを供給せられたるはまことに學界の缺陷を補ひしものであり、此點後進研究者の著者に對し心から感謝の意を表する所以である。

章を分つ六、序説、古代及び中世初期に於ける支那に關する知識、中世後期に於けるアラビア人の支那に關する知識、蒙古人勃興時代に於ける支那に關する知識、第十四・五世紀(元より明初)に於ける歐西の支那知識、東印度航路の發見と歐人の東航・宣教師の支那研究と支那學の成立の各章に於て例の流暢なる文をもつて支那に關する西方知見の増大變遷を説き、筆を十九世紀中葉に於て惜くも止めて居る。本書を讀過したる者は、何人も氏に續稿を希望せざるもの非ざるべく、氏が此點に於て再び天下の囑望に添ひ、現代に至るまでの各國支那學の趨勢を論じた著を續刊せられんことを衷心より期待する。コルデイエ氏逝いて以來歐米支那書誌學界は、其人なきを歎じて居る。石田氏が此方面に於てたゞに内國に對してのみならず、對外的にも堂々歩武を進まれんことは何人も期待に堪えぬ所であらう。

讀過後二三の氣付いた所を記して見るに、四四頁ワクワクを倭

國の對音とする説、ド・フーエ氏 *Arabische Berichten over Japan* 出でて以來遠藤佐々喜氏「日本に關する亞刺比亞人の知識」(東洋學報五)之を日本に紹介し、殆ど定説となつてをるがフエラン氏 *Madagascar et les Iles Tag-uag* (*Journal Asiatique*, mai-juin, 1904) の中にワクワクを二種に分け、西のワクワク島はマダガスカルなりと云ふ説を提起したが、氏は、今日東のワクワク島もスマトラ島ならんといふ考を抱き、ワクワク日本説を甚だ疑つてをる。アラビア語を全然知らぬ自分などは此問題に容喙の限りでないが、フエ氏の説の方が正しい様に考へられる。古代のアラビア人は、内田博士の説の如く或時代にはシラの島の名稱の中に日本も含めて呼んでゐたことが推定せられる。また近來フエラン氏によりその重要性がしきりに強調されてゐるズスコ・ダガマの水先案内たりしイブン・マージドに就いての記述は、將來本書増補の節是非挿入していただきたい。中世紀のアラビヤ通商と葡人の來航との中間時代にあつて南方海上の東西交渉は、イブン・マージド一派の水路誌の研究を通じて明かにせらるべきであらう (*Instructions nautiques et routiers arabes et portugais des XVe et XIe siècles, reproduits, traduits et annotés par Gabriel Ferrand* 最も此本は、未だ出版が完了してゐない)。此水路誌に關聯してフエ氏がアラビア人の先驅者としてペルシア人の海上雄飛を力説してをるのも注目に値ひする (*l'Element persan dans les textes nautiques arabes des XVe et XVIe siècles par Gabriel Ferrand, J. A., avril-juin 1924*)。羅針盤の知識もアラビア人はペルシア人より受入れたのだと云ふ。マルコ・ボ

ロに就てはベネデット教授の大研究は、多くの異説を提供してを  
 る。たとへば有名なマルコ・ポロの同囚者がポロの談話を筆記し  
 たと云ふ話は、傳説で實際は、通俗小説家たる編述者がポロの提  
 供したあらゆるノートを充分に推敲を重ねて西人の耳目にはいり  
 やすく書き直したのであると云ふ。ながい間東洋に滞在したポロ  
 にとつてその方が都合よかつたであらう。勿論是等の事は極めて  
 瑣細な事であり、篇叔の都合上、又は紙数の限定から著者は言及  
 されなかつたものとも見られ、本著の内容的價値を毫も微動せし  
 めるものでない。限られた紙數に巨多な事實を盛りし手際は著者  
 ならでは出来かねる手腕である。吾人は、最後に本書の重要性を  
 再び力説し、東洋研究者必携の好指針書として江湖に推薦する  
 (松本信廣)。

評書

寄贈交換雜誌圖書目錄

- |                   |          |
|-------------------|----------|
| 石氏星經の研究           | 上田 穰     |
| 日英交通史料九           | 武藤長藏     |
| 政秀寺古記             | 名古屋史談會   |
| 備後史談會八ノ六、七、八、九    | 備後郷土史會   |
| 防長史學三ノ一           | 防長史談會    |
| 蝦夷往來八             | 尙古堂      |
| 福岡五八              | 東西文化社    |
| 風俗研究一四七、一四八       | 風俗研究所    |
| 飛彈史壇一一ノ二、三、四      | 飛彈史談會    |
| 北方郷土三ノ一           | 函師郷土研究會  |
| 日向六、特輯            | 日向郷土會    |
| 石川縣天然記念物調査報告八     | 石川縣      |
| 伊豫史談、七〇、臨時増刊      | 伊豫史談會    |
| 神社協會雜誌三一ノ七、八、九    | 神社協會     |
| 人類學雜誌四七ノ七         | 東京人類學會   |
| 上毛及上毛人一八四、一八五     | 上毛郷土史研究會 |
| かたな七、八、九          | 中央刀劍會    |
| 金雞學院叢書五五、五六、五七、五八 | 金雞學院     |
| 金雞會報四、五           | 金雞學院     |
| 考古學三ノ三            | 東京考古學會   |
| 考古學年報一            | 東京考古學會   |
| 考古學雜誌二二ノ六七、八、九    | 考古學會     |

(五〇)